

ドゥルーズの「実在的経験」への視座

—思考と自己の力動的関係に着目して—

松枝 拓生

1. 序論

教育の様々な場面において世界や他者の可視化への要請が広がっている。実効性と効率性・有用性を重視する言説の流布する中で、曖昧さは抑圧され、あらゆるものが整然と把握しうるのだという想定が広がっている。例えば今井康雄は『心のノート』というメディア装置を分析しつつ、制度としての教育学の自壊の果てになお、他者の心への直接的接触による教育の実効性保証という考えが闊歩するさまを指摘している[今井 2009]。もはやポストモダンという言葉が取り立てて耳目を集めることもないが、大きな物語の喪失の感覚を未だに引きずりながら、それゆえにますます確実さ、安心をもたらしてくれる確固たる基盤への郷愁が強まっているのかもしれない。

こうした傾向は日本に限定されない世界的な傾向である。例えばイギリスの教育哲学者ポール・スタンディッシュは、確固たる基盤への郷愁が近代的主体観と共謀する様を指摘している[Standish 1995]。スタンディッシュによれば人間が「完成されていること・全体的であること」(wholeness)の理想によって駆動される近代教育観は、いまやあらゆる活動に正しい手続きや技術があるという考え方と結びつくことで、完成・全体性という考えが誤って理解される危険と隣り合わせであるという。すなわち、完成・全体性をそれ以上変化にさらされることのない固定によって理解してしまう傾向である。それは世界を固定して可視化し掌握したいという欲望の裏返しである[ibid.: 130]。実のところこうして近代教育に忍び寄る固定・可視化・把握への欲望が近代という時代性を超えて人間の根本的な傾向であることを論じつつ、スタンディッシュはそれを象徴する形象としてシェイクスピアの劇『オセロ』の主人公を描き出す。

完成の瞬間はあらゆるものが止まってしまう瞬間である。嵐の中の旅のあと、デズデモナーナと再びあいまみえ歓喜するなかで、オセロは言う。「今死ぬことができるなら、それが一番幸せかもしれぬ。」彼はその言葉の含意全てをもって世界を固定したい[wants to fix]のである。彼は(白地に映える黒のように)麻薬的ないしは鮮烈な刺激[fix]を必要としているのであり、したがって世界の変化可能性からの解放を必要としている。彼は整然とした解決策の黒幕[fixer]である——彼はものごとを解決し、まとめあげる。彼は自らを掴んで離さず自らのなすことを支配する執着[fixation]にとらわれている。[ibid.]

変化の忌避と固定への執着、曖昧さやグラデーションを排除した白か黒かの二分法が帯びる明瞭さへの魅了、整然たる問題解決と世界分節を成し遂げる黒幕といった要素によって戯画化されたオセロを前にして、次のような疑問が頭をもたげたとして不思議ではあるまい。果たしてこうした執着に囚われたオセロに、今まさに彼の足下で、彼の窺い知れぬような形で微細かつ精妙に進行しつつある、世界の生成変化というリアリティにさらされるという考えが、いかほど意味をなすものとして受け入れられるだろうか。オセロが把捉しようと躍起になっている眼前の世界が、実は把捉しえない無限の運動を湛えつつ、その流動を通じてオセロ自身をも変容させずにはおかないということは、一見逆説的で皮肉めいている。しかし、この極端な姿において描写されたオセロが象徴する人間の姿は、多かれ少なかれ今日を生きる我々にも当てはまる。変化や曖昧さを忌避し明瞭かつ整然と固定された枠組みで世界を認識しようとする傾向は、いたるところに見受けられる性質ではなかろうか。ならば、我々はいかにして世界の生成変化へと自らの身をゆだねることができるだろうか。

世界の把捉を望むオセロを形容する「黒幕」(fixer)という語が示唆しているように、把捉の欲望には世界を把捉できる主体としての自己イメージが不可分な要素として伴っている。それは言わば舞台の全てを巧みに支配する裁定者である。スタンディッシュは同様の関心を表明する別の著作で、確実な基盤を提供する原理として合理性が思考様式を席卷してきたこと、そしてそうした基盤は自律性に象徴されるような、世界へと還元しえないそれ自体独立した主体や、「万物の判断の拠点でありうるような、世界に対する安全な眺望地点」という自己観を伴うことを指摘している[スタンディッシュ 2012: 442-443]。つまり、把捉の欲望は独立した自己イメージと結託している。こうした世界観は認識する自己と認識される世界の主客二分法によって支えられるとともに、その紐帯をなすのは客体を把捉する中立で透明な道具としての認識である。

本稿が問題にしたいのは、こうした基盤や確実さへの貪欲さが、把捉しえない曖昧さ、推移や変容に特徴づけられる生成変化し続ける世界のリアリティを抑圧してしまうということである。このような問題意識に導かれつつ、以下フランスのポスト構造主義の哲学者であるジル・ドゥルーズ(Gilles Deleuze, 1925-1995)の哲学を、その「思考」観に着目しつつ読解する。彼は逆説的にも、思考は衝撃を受けて受動的に開始されるしかないと論じる。その論の意図と内実の読解を通じて、自己が世界に触発され、両者が相互混交的に変容を被るまさにその舞台として、思考行為を理解する道が開かれる。それは、基盤や確実さという発想や把捉する自己という考えがもはや機能しえない世界の流動の位相、ドゥルーズが「実在的経験」と呼ぶ経験の位相へと思考の位相を移すことを促すのである。以下ではまず第2節で、ドゥルーズの思想が世界の生成変化に身をゆだねる思想であることを論じる。その際ドゥルーズのカント批判の焦点を示すことで、彼の生成変化思想の関心が、主客二分法の認識の枠組みでは汲み尽くすことのできない「実在的経験」の様相を明らかにすることにあつたことを示す。第3節では、「実在的経験」の有り様をすぐれて示す出来事としての「非意志的思考」の諸側面を明らかにすることによって、思考と自己の力動的な関係を論じる¹。

2. 実在的経験という論理構成：変化に身をゆだねる思想

以下ではカントの超越論哲学の試みとの対比の中でドゥルーズの哲学の特質を、すなわちドゥルーズが生成変化思想と経験をどのように読み解こうとするのかを確認する。

ドゥルーズは自らの思想を「超越論的経験論」(l'empirisme transcendantal) [DR: 187=224]として提示することがある。『ニーチェと哲学』において「多元論[le pluralisme] (別の仕方と言うと経験論)は哲学そのものと一つでしかない。多元論は、哲学によって考案されたまさに哲学固有の思考様式である」[Nph: 4=25]と述べるように、ドゥルーズにとって第一に重要なのは多元論としての経験論である。しかしドゥルーズの思索に特徴的なのは、超越論的な領野についての思考を放棄して、生起する個別の経験の分析の次元に留まるのではなく、経験がそこから発生する深層としての超越論的領野に切迫しようとする点である[小林 2014: 106]。その点でその哲学は決して超越論という問題構成を拒絶するものではない。むしろドゥルーズは「超越論的なものの驚くべき領域を発見している」[DR: 176=212]カントを高く評価し、超越論的な問いを立てる態度を自らの哲学に取り込んでいる。ところがドゥルーズはカントに対していくつかの不满を表明してみせる。それらの批判の焦点は、経験の条件を問うという超越論的な問題構成におけるカントの不徹底へと向けられる。それは、カントが超越論的主観の構造を、心理学的に経験される自己の「複写」によって描いてしまったということである[DR: 176-177=212]。これは超越論的な領野を経験的な概念から帰納的に導出するという過ちである。なぜなら超越論的な領野の探求は本来、経験の可能性の条件を探る試みであり、経験の根拠の探求だからである。すると上記の「複写」は超越論的な領野(根拠)を経験的な概念(根拠づけられるもの)で根拠づけるという循環論法に陥っていることになるのである。この批判は何を意味するのだろうか。本稿ではドゥルーズの指摘の妥当性には立ち入る余裕がないが、この指摘がドゥルーズのどのような関心を反映したものであるかを以下確認したい。

カントがその批判哲学において成し遂げたいいわゆる「コペルニクスの転回」の根本的理念は、独断論における主体と客体の合目的的な予定調和に代わって「客体の主体への必然的従属の原理を置」いたという点にある[PK: 23=35]。その際カントが立てた問いは「経験がいかにして主体に与えられるか」というものであった。カントの超越論は、感性・構想力・悟性・理性の協働によって説明される。時間と空間という直観形式において外界の多様なものを受容し、悟性のカテゴリーを通じて対象世界が形成される。そしてカント超越論の不可欠な要素としての「権利問題」、すなわち、どのようにしてこれらア・プリオリなものが経験に必然的に適用されるのかという問題を根拠づける役割を果たすのが、他ならぬ超越論的主観の同一性である。ドゥルーズによればカントの超越論の特性は感性・構想力・悟性・理性の「置換体系」の下で作動する諸能力の協働・一致であり、「(私は思考する)における「自己」の同一性こそが、すべての能力の一致を根拠づけ」る[DR: 174=210]のである。そしてドゥルーズの「複写」批判が重要な意味を持つのはここにおいてである。ドゥルーズは、カントが結局こうした主観を想定するだけで、主観の発生を問うていないことを問題視する。それは独断論が抱えていた主体と客体の予定調和のアポリアを、主観への客体の従属という調和へとすり替えただけではないか、とドゥルーズは指摘する[PK: 34-35=51]。ドゥルーズはそのようなカントのふるまいを、経験的に知っている実体的自己イメージに囚われ、無意識のうちにそれを温存する行為だとみなしてい

る[DR: 178-179=214-215]。つまり、現象がそれに与えられることで経験が構成される場所の、経験の起源としての同一的自己の物象化が懸念されているのである。

客体の主体への従属という構造を普遍的に根拠づけるものとして、超越論的主観の同一性が要請される。ここには幾重にもわたって自己の物象化が作動している。主客の二分法の下、変化する世界＝客体は諸能力の協働に従属して一般的な形式とカテゴリーを付与され、ある一般化された形式において主体へと与えられることになる。そしてそうした構造を究極的に根拠づけるものこそ、経験的自己の複写によって得られた同一的自己というシステムである。つまり主体には一般化された限りでの経験が与えられる上に、このことは自己の同一性によってあらかじめ裏書きされている。あたかも主体は変化することがないかのようである。同一な自己を想定するだけでその発生を論じないために、カントの超越論はもう一つの批判——これは「複写」批判とコインの両面をなす——を被る。ドゥルーズのカント批判の第二の焦点は、その超越論が「可能的な経験」(l'expérience possible)の条件づけしかできず、我々の個別具体的な経験、すなわち「実在的经验」(l'expérience réelle)を説明できない点にある。カントの超越論によって条件づけられる可能的経験は、悟性概念のカテゴリーを適用されて得られる一般的な経験の枠組みであり、人間にとっての経験の「一般的モデル」にすぎない。こうした枠組みは「実在的なものに対してはあまりにも一般的であり、大きすぎる」のであり、「網の目は粗すぎて、どれほど大きな魚でも通り抜けてしまうほどである」[DR: 94=116]。言うなれば、カントの超越論は経験の一般構造を説明しはすれども、ほかならぬあの日のあの出来事といった、個別具体的に一回きりの特異な経験がいかに関与するのかを説明するには不十分である。可能的経験は実在の経験を説明するには抽象的すぎると言っても良いだろう。そしてこの限界は、超越論的主観の同一性が疑われていないことと表裏一体である。可能的経験は主体それ自体の発生や変化を扱いきれないのである²。

ドゥルーズのカント批判を総合的に理解するならば、次のような批判の射程が浮上する。カントが経験的自己を意図の有無はともかくも超越論の構成に紛れ込ませてしまった結果、カントの超越論は自己同一的で世界の生成から距離をとった主観と生成する世界の主客二分法を維持することとなった。それゆえにカントの超越論が関与できるのは「可能的経験」に限られてしまう。カントの超越論的主観に規定される可能的経験は、変化から乖離した自己による対象世界の認識にすぎず、自己もまた変化にさらされている経験の総体、すなわち実在的经验を捉えられない。ここから帰結するのは、一般的な経験の条件づけにとどまらない経験の個別具体的な諸相を論じるためには、自己それ自体の変化を組み込んだ論理構成が要請されるということである。ここにこそドゥルーズの経験論重視の視点が発揮されている。ドゥルーズは処女作のヒューム研究の書である『経験論と主体性』においてすでに、主体がいかにして発生するのかという問いを主題化していた。一般的にヒュームはカントを独断論のまどろみから目覚めさせた思想家として、カント哲学の前段階に位置づけられるが、ドゥルーズは両者を直線的な思想史の中に位置づけるのではなく並列して検討して見せ、ヒューム研究に見出した主体の発生の問いを携えてカント批判に臨んでいるのである³ [國分 2013: 42-46]。生成から超越した自己を措定している限り経験の微細な多様性を理解することはできない。よって超越論的主観の発生を問うようにして、生成から逃れる超越項を排除しなければならない。つまり、ドゥルーズが

カントのうちに見出す超越論的批判の不徹底は次のような点に特徴づけられる。カントは条件づけられる側であるはずの経験的な自己のイメージによって条件づけの原理としての超越論を構成してしまっており、それゆえにカントの超越論ではマクロ的・ミクロ的な水準で絶えず変化しゆく世界全体の運動を捉えきれないのである。経験からの引き写しによって指定されてしまうものの発生を問い続けるラディカルな視点を経験論から引き受けることで、ドゥルーズは発生し続ける運動によって特徴づけられるような超越論の構成へと舵を切る。ここにドゥルーズの超越論的経験論の第一の主眼があると行って良いだろう。

以上の帰結は、発生や変化を逃れたいかなる超越項をも排した思想の必要性である。ドゥルーズの超越論的経験論は先行する自己の存在をあらかじめ前提しない。むしろ、絶えず関係性を組み替えていく微細な諸力どうしの終わりなき不均衡な運動から、その都度の自己や理性、あるいは事物の意味といったものが発生し形成されることを論じる。「起源とは起源における差異であり、起源に置ける差異とは序列であり、すなわち、支配する力と支配される力、従わせる意志と従う意志の関係である」[Nph: 8=32]と述べるように、ドゥルーズにとって単一の普遍的起源は存在しない。そしてダニエラ・ボスが強調しているように、この不均衡な運動が均衡に到達することはなく、別の不均衡な関係へと横滑りするだけで、運動に終局地点もない[Voss 2013: 10]。ドゥルーズの哲学において、我々の具体的な経験を発生させる超越論的領野は人格を伴わない非人称的かつ動的な場である。本稿は3節で超越論的な「強度」が我々の経験の発生に介入するさまを確認するだろう。このようにして、超越項のない生成変化の思想においてこそ、実在的経験に迫ることができるのであり、それを試みるのがドゥルーズの超越論的経験論であることになる。次節では、ドゥルーズの思考についての議論がカント批判と地平を共有することを確認し、通念的な思考観に対するオルタナティブとして提示される「非意志的思考」が、自己の破壊と発生を射程に入れた、実在的経験の範例であることを明らかにする。

3. 実在的経験としての思考へ

3-1. 思考のドグマティックなイメージと非意志的思考

ドゥルーズは博士論文『差異と反復』第三章において、西洋哲学がその批判の歴史をもってしても逃れられずにきた思考についての主観的前提、「ドグマティックなイメージ」[DR: 172=207]と呼ばれるものを告発するというスタイルをとりつつ、思考することの含意を論じている。当然前述のカントもそうした前提に浸食された一人として批判される。そこで批判の俎上に載せられるのは、「思考する者の良き意志と思考の正しき本性[une bonne volonté du penseur et d'une nature droite de la pensée]の二重の側面の下に、真理を捉える才能を持ち、真理との親近性に恵まれた、天性の思考[une pensée naturelle]という前提」[DR: 171=206]である。天性の能力としての思考というイメージは、1)人は生まれながらに思考することを欲しかつそれが可能な、有能な知性的存在である、2)思考は真理へと上昇するものである、という二重の前提の下に醸成される。こうした思考観は、本来的に自由意志によって自己の思い通りにできるという思考の性質、あるいは思考する自己と思考の親和性を示唆し、対象把握のための中立透明な道具という思考観と手を取りあう。

こうしたイメージが「ドグマティック」と形容される所以は、以下のようなものである。た

しかに西洋哲学は哲学の前提を問い直し続けてきたし、批判的に自己省察を行ってきた。しかしまさにそうした問い直しと批判を可能たらしめている暗黙の前提、無意識下にあり自覚できずにいた前提がある。例えばデカルトの懐疑は「自我、思考、存在が何を意味するかくらいは誰でも概念抜きで知っている」ことを前提になされているのである[DR: 169=203]。それは無意識に繰り返されることでますます自明となってゆくようなイメージ、前提としていることさえ気づけないような前提である。哲学はまさにそうしたイメージに囚われている。

ここで改めて前節のカント批判の趣旨に立ち戻ってみると示唆深いものがある。ドゥルーズの批判は、カントが理性に内在的な批判を展開することを試みたにもかかわらず、経験を条件づける超越論の領野に経験的な自己のイメージを複写し温存してしまったというものであった。つまりドゥルーズのカント批判は「思考のイメージ」批判に連なるものだといえる。そしてそのことは、「思考のイメージ」を構成する中心的な公準として「再認」(récognition)が挙げられ検討されていること・再認が『カントの批判哲学』においてカントの「認識」を構成する本質的要素として言及されていること[PK: 25=38]からも明らかである。

再認は原理的には次のような概念に負っているとされる。すなわち、「諸能力の一致」(concordia facultatum)及び「思考する主観の統一」(l'unité d'un sujet pensant)としての「共通感覚」(le sens commun) [DR: 174=209-210]である。再認は既知の体系を背景に前提として置きつつ、新たに現れる対象の数々を分節し一般知へと回収してゆく所作と説明される。それは例えば「これはなくしたと思っていた私の白いコップである」、「今日も太陽が東から昇ってきた」といった命題の形をとる。こうしたモデルに特徴的なのは、変化してゆく世界を既存の一般知の体系へと振り分けてゆく、変わらない「私」と同の反復としての世界が前提されていることである。一年前に見た白い物体と今目前に存在する物体を同じコップとみなす同定可能性は、時間的変遷を超出して両者を俯瞰できる主観の通時的同一性と、世界を包摂しうる概念の一般性を要請している。再認はまた諸能力の協働という共時的同一性をも要請する。今聴いている音楽がある作曲家の有名な曲であると再認するとき、聴覚の感覚能力と記憶の想起能力が同一の対象に向かって使用されていることになる。つまり、聴いているのも想起しているのも同じ「私」でなければならない。このようにして、再認は自己の同一性の感覚を担保することになる。

「天性の思考」という前提、ひいてはドグマティックなイメージ全体は「再認」に多くを負っている。ドゥルーズが指摘するように、再認は自発的な思考を我々がイメージするときの典型的なモデルであるとともに、我々が日頃思考しているつもりするとき、実際にもつばら行っていることだからである。再認は滅多に失敗することがなく、失敗したとしてもそれは不注意や疲労由来する例外的な事態であると一般にみなされている。うまくいって当たり前のものであり、それゆえに思考の有能さと思考する主体の万能感を満足させる。無意識に繰り返されることで自明さが増してゆくという構造を支え、助長しているのはまさにこの再認なのである。

このようにして見てみると、カントが超越論哲学のプログラムの中に経験的な自己のイメージを取り込んでしまったのも無理はないかもしれない。再認は同一的な自己のイメージを要請する。そして日常的な世界とのかかわりをもつばら再認によって遂行され、それゆえに思考するという行為のイメージは再認の枠組みによって形成されてゆく。再認の無批判な反復は同一的な経験的自己のイメージの反復を伴うことになる。実地になされる再認の繰り返しを通じて、

思考とは再認のことであるというイメージ、経験的自己のイメージが、前提していることすら気づかない前提、すなわち「常識」(le sens commun) (=共通感覚) になってゆくのである。ドゥルーズはこうした再認の特権性に危惧を抱く。それは厳密には思考ではないにもかかわらず、再認するだけで我々は思考したつもりになっており、思考のより本質的な運動、「より奇妙でより危険な冒険」[DR: 176=212]を見失いがちである。このように指摘し、ドゥルーズは「非意志的思考」という概念を導入する。

思考のなかに強制的に掻き立てられた非意志的な [involontaire] 思考しか、不法侵入 [effraction] によって世界の偶然性から生まれるがゆえにいっそう絶対的に必然的な思考しか、思考は存在しない。思考において始原であるもの、それは不法侵入、暴力 [la violence] であり、それは敵 [l'ennemi] である。[DR: 181=218]

思考を生じさせるのは思考する者の積極的意志ではなく敵の「不法侵入」であり、絶対的な偶然性に開かれた暴力的な出来事であるというのがドゥルーズの主張である。思考する者は自由に思考を始めることもできなければ、暴力による思考の煽動に抗うこともできない。我々があてにできるのは「思考することを強制するものとの出会いの偶然性」(la contingence d'une rencontre avec ce qui force à penser) だけである。このような意味で思考は「受苦」(une passion) である[DR: 182=218]と述べられる。ここからはいかなる意味でも、思考に天性の恵み、あらかじめ授けられた資質といった光景を見て取ることはできない。むしろ思考を起動させるものは自己統治の外部から不意に訪れる。

不法侵入するもの、そのことを、ドゥルーズは「強度」(intensité) と呼ぶ。強度は等質的で同一的な項などではなく、同一性に「還元できない不等性」[DR: 286=333]、異質性であり、同一性の原理に沿って輪郭を固定している主体や対象の背景でそれらを横断する、深層の諸力の示差的要素である。ドゥルーズの生成変化の思想はこうした力の差異に依拠している。再認は同一性の原理に依存した世界把握の方法である以上、強度は再認による世界の整然とした分節化をすり抜ける。しかし、強度はいささかも観念的ではなく、むしろ同一性に論理的に先行し、世界と経験を発生させる実在的境位であるとされる。強度は再認できない力動的質料であり、自己は言わば見えない敵に取り囲まれているかのようである。「背景はそこにあり、目などないのに私たちを見据えている」[DR: 197=236]。強度は偏在し、いつでもどこを何をきっかけにして触発されるかさえ我々は前もって知る術をもたない。強度を潜在的に湛えた世界の中での思考の発生に際して、我々は不意打ちをくらって抗いがたい思考へと引きずり込まれるのである。

3-2. 共通感覚の破壊

ドゥルーズはまず、強度の不法侵入が引き起こす思考の本質的な特徴、すなわち共通感覚の体制下での使用を超えた「超越的な行使 [un exercice transcendant]——n 乗 [n 次の力] [la nième puissance]——」[DR: 182=219]へと高められ活性化するさまを描き出している。これは共通感覚の崩壊と同一的自己の破壊の契機として理解しうる。

ドゥルーズによれば、強度は「感覚されえない」(l'insensible) が、「感じられることしか可能

でないもの」(ce qui ne peut être que senti)であるという[DR: 182=219]。すなわち、強度は再認の原理に制約されない感覚能力(*la sensibilité*)を要請する。「感覚されえない」のは共通感覚の下で感覚されもすれば思い出され想像されもするという諸能力の協働の対象ではないからである。ゆえに「感じられることしか可能でない」強度は共通感覚から外れた感性の働きを要請する。ドゥルーズによればこうした強度の不法侵入は、電流が走るようにしてあらゆる能力へと行きわたる「暴力の連絡」[DR: 189=227]であり、各々の能力がそれぞれ固有の対象だけにその力を発揮する状態、すなわち超越的行使と呼ばれる事態を引き起こす。ドゥルーズはこれを能力の高次元への活性化とみなす。このことは共通感覚の「この上ない貧弱さ」(*les plus grandes faiblesses*)と対照される、超越的行使の「最も驚異的な創発」(*le plus prodigieuses inventions*) [DR: 252=297]を引き起こしうる力に言及している点に明らかである。つまり、共通感覚は諸能力を事物の再認という役割へと、そして再認するに足るだけの限定された力能の発揮へと抑制するのに対し、強度の触発は諸能力を創造的な力能の発揮へと展開してゆくというわけである。

「創発」に込められた含意は後述するが、ここでは共通感覚の破綻に着目したい。ドゥルーズは次のように述べている。

各々の能力はおのれの蝶番から外れている[*Chaque faculté est sortie de ses gonds*]。だが、その蝶番とはすべての能力を回転させ収束させて[*converger*]いた共通感覚の形式以外の何でありえようか。それぞれの能力は [...] その n 乗に達するために [...] 共通感覚の形式を打ち砕いたのである。[DR: 184=220]

n 乗に達する諸能力は感覚能力同様に、共通感覚から外れ、諸能力の協働という前提を破綻させる。注目すべきは、共通感覚の破壊が「激怒する、(怒りに) 我を忘れる」を意味する表現“*sortir de ses gonds*”で描写されていることである。「蝶番から外れる」あるいは日本語の「我を忘れる」という表現は、力を管理し統制する中心軸が麻痺し、拘束されていた力が暴発的に解放された状態を想起させる。力を特定方向への収斂へと整流させる準拋枠から逸脱するポテンシャルのイメージが重ねられているのである。このとき共通感覚の破碎は二重の含意をもつと考えられる。非意志的思考による共通感覚の破壊が示唆するのは、一方で、主客の対立の構図における再認を支える主観的同一性の破碎であり、荒れ狂う思考の流動が同一性に亀裂を入れる出来事である。思考はここではもはや思考する者の自意識の裁定を逸脱し、むしろそうした裁定を麻痺させていると言ってよいだろう。もう一方で示唆されるのは、対象の同一性の不在、すなわち思考する行為はもはや世界を〈これ〉や〈あれ〉とあらかじめ想定された対象への裁断・収斂へと差し向けたりしないということである。非意志的思考は合理性の安全な枠組みが揺らいだ臨界で試される。

このようにして、強度の不法侵入に伴って偶然かつ暴力的に発生する非意志的思考に伴う超越的行使と共通感覚の破壊は、以下のような性質によって特徴づけられるだろう。非意志的思考は主体が強度という世界の質料からの触発を受けて発生する運動である。ゆえにそれは自己にとって、世界の力動的運動を被る本質的に受動的な契機である。それは再認という透明で中立な媒体を介して世界を把捉する裁定者としての自己観とは対極をなす様相である。強度によ

る感覚能力の触発に端を発する諸能力の超越的行使は、主権者たる自己に服する能力というイメージを覆す。非意志的思考において能力は世界からの働きかけを受けて、それ自体が変質する。それがゆえに共通感覚の破壊が発生し、自己同一性がひび割れる。それは、言わば思考という述語の運動によって主語が破壊されるという逆説的な運動である。非意志的思考は、思考という行為を、把捉しえないものに触発される経験として提示し、整然たる主客二分法の紐帯ではなく、世界全体の力動的生成変化のプロセスの一部として描き出すものである。

3-3. 「問題」への応答

ここまで、超越的行使が引き起こす共通感覚の破壊、すなわち自己破壊的側面に焦点を当ててきた。以下では超越的行使の「創発」する力、思考の創造的側面を検討する。ドゥルーズは非意志的思考のプロセスの一側面として「理念」(les Idées)としての「問題」(les problèmes)への応答を論じている。「理念」という用語はプラトンを想起させるものの、プラトンのそれとは対照的に、生成する仮象世界の彼方にある普遍的超越項でもなければ、「善」や「美」といった特定の観念を特権化するものでもない。ドゥルーズの「理念」は差異化する強度のそれであり[Lapoujade 2014: 95=117]、世界に内在的である⁴。生成変化する世界の質料である強度に「理念」を当てがうというドゥルーズの論理構成は、「理念」への希求というプラトンの発想を利用することで、徹底的に世界の生成変化へと立ち戻り向かい合うという非意志的思考の特性を、ひいては彼の内在思想の立場を象徴的に示している。そうした「理念」が帯びる性質としての「問題」は、次のような特徴を持つ。それは本質的に解に先行して存在し、解を産出する[DR: 205-213=244-252]。そして諸々の解はひとつの「現働化」(actualization)として、「理念」が様々な特異な現実的形態をとって発生する実在的経験として理解される⁵。つまり「問題」は強度の「理念」が有する問題提起の特性であり、強度が提起する問いかけである。そして非意志的思考こそは必然的にそうした「問題」への応答を担うのであった。こうした観点からすると、「問題」への応答と解の産出は、非意志的思考による、自らを強制的に引き起こした強度への応答である。翻ってみれば、強度による非意志的思考の強制は実のところ世界から思考する私への問題の提示であり、他ならぬ思考がそれに応答することで新たな具体的経験が発生するという論理連関が見出される。この意味で非意志的思考は世界の力動的生成変化のまさに駆動力であり、それを誘発するのが強度の不法侵入だと言ってもよいかもしれない。強度が「理念」の現働化の流れを導き、問題にとっての解の諸事例を誘発する」[DR: 315=366]と述べられる所以である。

ドゥルーズは「問題」という用語が教育場面を念頭に置くときにすぐに連想させるような、正解へとたどり着く(あるいはたどり着かせる)ためのものというイメージを退ける⁶。強度の「問題」には正解がない。というのも、もし正解があらかじめ想定されるようなものだとすれば、非意志的思考は再認と区別できなくなるだろう。正解を前提する問題への応答は、既成の一般的知識の体系内で処理しうるものであり、正解へと至る正しい方法を選び、それを正確に適用することが肝要となる。そもそも強度の「問題」に唯一無二の正解があるとすれば、強度と非意志的思考の相互性が生み出すのは、極端に言えば決定論的な世界になってしまうだろう。むしろ「問題」を通じて実現される解は複数のであり、互いに還元されることがない特異な解

なのである⁷。どのような解が生み出されるかはあらかじめ予測不可能である。ここにこそ世界の多元的生成を肯定しうる非意志的思考における超越的行使の「創発」の意義がある。そしてここまでの論述からも予想されることだが、解の産出は思考する自己の具体的な変容を導く。強度の不法侵入を通じた諸能力による共通感覚の破壊という内側からの自己破壊が示すように、自己は明瞭な線によって世界と隔てられているのではなく、むしろ世界に織り込まれている。そして「問題」に対する解の諸事例は自己の新しく別様の姿をその内に折り込んでいるのである。共通感覚の破壊が述語による主語の破壊を表現するものであったならば、「問題」への応答は述語による主語の新たな発生の表現として理解されるだろう。

本節の議論をまとめよう。ドゥルーズは西洋哲学に思考のある特定のイメージへのとらわれを見出す。そのイメージは、思考と思考する自己にそれぞれ、世界把握の道具としての中立さと、思考を使いこなし客観的真理を発見する有能さを付与する。そして再認に支えられた構造が示唆するように、イメージの背後には主客二分法の図式が控えており、主観としての自己の同一性を想定するものであった。こうして批判の焦点が自己同一性の想定と思考を認識へと還元してしまうことに収斂することを踏まえれば、ドゥルーズのドグマティックな思考イメージの批判と、2節で確認したカント批判は同型である。思考という主題に場を移し、カント批判の中心にある関心を発展的に展開しているともいえる。つまり、自己が変化を逃れた存在として物象化されることで実在的経験が捉えられないという問題である。この観点からすれば、非意志的思考はカントや西洋哲学に通底する主客二分法に抑圧された、思考の動態を描出することで、思考を軸として展開される実在的経験の範例を提示するものだと考えられるだろう。ドグマティックなイメージが前提とする共通感覚を逃れてゆき、まさにその逸脱の運動によって共通感覚を破壊する思考を論述することで、ドゥルーズは同一的に存在し世界把握する自己のイメージのまさに核心を攪乱する。強度による強制という局面は通常的思考イメージに伴う自己の能動性を覆し、強度の「理念」による問題提起は単なる客体の写し取りに還元されることのない思考の創造性を示唆している。強度との関係のもとで展開される非意志的思考は、互いに織り込まれあった自己と世界の相互触発的な破壊と発生の、まさに凝縮された縮図である。

4. おわりに

非意志的思考は同一的自己による世界把握のための従順な道具ではなく、思考する自己自身を変化へと巻き込んでゆく力動的な契機である。それは思考を軸として描出される実在的経験の雛形であり、固定された不変の超越項を退けるドゥルーズの生成変化の哲学にとって掛け値なしに重要な、いわば彼の思想の本質の体现である。というのも、思考とは何たることかというイメージこそ、思考を自らの武器とする哲学にとって、哲学という営為自身の自己規定にかかわる決定的な重要性を持つからである。また同時に、思考のイメージがそのまま世界観を規定する力を持ち、世界の実在の様相をいかに理解するか、あるいはしうるかという問題に影響を与えるからである。この意味で、ドゥルーズにとって非意志的思考は従来の哲学において優勢な物の見方を攪乱すると同時に、彼が実在の様相とみなすものを例示しもするという、二重の重要性を持つものとも言えよう。

本稿の冒頭で提示したオセロが象徴するイメージは、思考のドグマティックなイメージとあ

る面で響きあう。双方に通底するのは流転する世界から距離をとった裁定者としての自己や、裁定者たる自己に従って客観的な何かを捉えることのできる思考に代表されるような、認識を紐帯にして構築された主客二分法の世界観である。そうした世界観においては、世界を固定したいという欲望は、自己の固定された同一性に係留されている。少なくとも自己は固定された全体性や完成形を持つというイメージがあるからこそ、認識を道具として駆使しながら世界を把握しうる、世界も固定しうるという考え方が現実味を帯びてくるのである。また、認識のもたらす世界を把握しているという実感ゆえに、認識する自己のイメージも再帰的に強化されてゆく。こうして把握への欲望と同一的な自己イメージは相互循環的な関係を取り結んでおり、同一性という想定がこの関係全体を支えている。超越項を退けるというドゥルーズの哲学的態度は、そうした循環を逸脱し自己の同一性を破壊する思考の動態を提起することで、同一性の専制に抵抗する道を示してくれている。つまり、主客の二分法を崩し、世界に織り込まれた自己の破壊と発生を要請する思考の動態は、把握するのではなく新たに創り出す営みとして自己提示しながら、自らを例証として、我々の生成変化しゆく世界への視座を培ってくれるのである。教育において優勢な可視化や実効性の言説の背後にはオセロによって戯画的に示された把握と固定へと向かう人間の傾向があるとすれば、ドゥルーズの提示する思考はそこから逸脱しながら、創造に特徴付けられるような別の方向性を人間が取りうることを示唆しているのではないだろうか。

註

¹ 本稿は可能的経験についてのカント批判と非意志的思考を貫く論点として、自己の物象化の問題を見定める。そして物象化された自己観と対象把握的な思考の連関に着目した読解を通じて、ドゥルーズのカント批判が現代の実効性優位の言説への批判として現代的意義を持ちうることを示そうと試みる。こうした角度からのドゥルーズの教育的意義の提示は、従来のドゥルーズ研究では管見の限り、なされてこなかった。

² 江川隆男は、実在的経験を「経験のまさに唯一の様相であり、そこに或る積極的なものを含むようなわれわれ自身の変様のことである」と述べる[江川 2003: 23]。

³ ドゥルーズは『無人島』所収のインタビューの中で、「哲学史」を「哲学の劇場」(un théâtre de la philosophie)で置き換えることができるという趣旨を述べている[ID: 199]。直線的に構成され、それを学習せずに思考することの許されない様なものとしての「哲学史」に呪縛されることなく、諸々の哲学の仕方を平面上に並べて「コラージュ」し思考を触発する道具にするというドゥルーズの発想をここに垣間見ることができる。

⁴ ドゥルーズの弟子であるダヴィッド・ラブジャードは、ここにドゥルーズの「思考」論の特質を見出し、彼の思考概念はカントの超越論に照らしたときに、悟性の介入なしに感性と理性を直接つなぐものと理解できることを指摘している[Lapoujade 2014=2015: 96=118]。

⁵ ドゥルーズによれば、諸事物は、諸々の「理念」という問題から具現される解の事例として理解されなければならないとされる[DR: 236=279]。また、「現働化」は「潜在的なもの」(le virtuel)としての「理念」が具現化され諸事物が発生するプロセスのことであり、同一性とも類似とも無縁であるために創造的であるとされる[DR: 272-274=318-321]。こうした構成はバルクソンの影響の下にある。

⁶ 「先生が問題を出し、我々の仕事はそれを解くことであり、その仕事の結果は強大な権威によって真偽の質が与えられると考える先入観」は「幼稚な先入観」である[DR: 205=245]。

⁷ ドゥルーズにおいて超越項は介在せず、それゆえに複数性が肯定される。「理念」は断じて本質ではない」[DR: 242=286]とされ、諸々の解はどれが理念=本質の正解に最も似ているかという観点から互いに序列化されることがない。こうした観点からドゥルーズはプラトンを批判する。理念というモデルとそのコピーという区別を作ったことで、理念を「分有」するコピーと分有しないシミュラクルという価値序列を作り出したからである[DR: 87=107-108]。

引用文献

文中では[著者名 発行年: 頁数]で指示する。ただし該当著作全体の見解ないし趣旨を提示する場合、[著者名 発行年]で指示する。

ドゥルーズの著作については文中では書誌情報末尾の略号を用い、[略号: 原典頁=邦訳頁]で示す。訳出に際しては邦訳を参照しつつ、引用者が訳出した。

- Deleuze, G. 1962 *Nietzsche et la philosophie*, 6e éd., Press Universitaires de France. =2008 江川隆男訳 『ニーチェと哲学』河出書房新社 (河出文庫) : Nph
——— 1963 *La Philosophie critique de Kant*, 4e éd., Press Universitaires de France. =2008 國分功一郎訳 『カントの批判哲学』筑摩書房 (ちくま学芸文庫) : PK
——— 1968 *Différence et répétition*, 12e éd., Press Universitaires de France. =1992 財津理訳 『差異と反復』河出書房新社 : DR
——— 2002 *L'île Déserte*, ed. Lapoujade, D. Paris, Éditions de Minuit. : ID
江川隆男 2003 『存在と差異』知泉書館
今井康雄 2009 「教育学の変貌」に関する覚え書——教育学はいかに変貌を生き延びるか」
矢野智司・今井康雄・秋田喜代美・佐藤学・広田照幸編『変貌する教育学』世織書房 pp. 3-20.
小林徹 2014 『経験と出来事 メルロ＝ポンティとドゥルーズにおける身体の哲学』水声社
國分功一郎 2013 『ドゥルーズの哲学原理』岩波書店 (岩波現代全書)
Lapoujade, D. 2014 *Deleuze, les mouvements aberrants*, Paris, Éditions de Minuit. =2015 堀千晶訳 『ドゥルーズ——常軌を逸脱する運動』河出書房新社
Standish, P. 1995 “Postmodernism and the Education of the Whole Person” *Journal of Philosophy of Education*, Vol. 29, No.1, pp. 121-135.
スタンディッシュ、ポール 2012 齋藤直子訳 『自己を超えて ウィトゲンシュタイン、ハイデガー、レヴィナスと言語の限界』法政大学出版局
Voss, D. 2013 “Deleuze's Rethinking of the Notion of Sense”, *Deleuze Studies*, Vol. 7, Issue 1, pp. 1-25.

(臨床教育学講座 博士後期課程 3 回生)

(受稿 2016 年 9 月 8 日、改稿 2016 年 12 月 1 日、受理 2016 年 12 月 26 日)

ドゥルーズの「実在的経験」への視座

—思考と自己の力動的関係に着目して—

松枝 拓生

昨今、教育の様々な場面で実効性や可視化を要請する言説が広がっている。そうした情勢の背後に、世界を把握することへの人間に内在的な欲望が潜んでいるとすれば、我々は間断なき変化の只中にある世界のリアリティへといかに身をゆだねうるだろうか。こうした問題意識に導かれつつ、本稿ではフランスの哲学者ジル・ドゥルーズの、思考をめぐる思想を讀解する。自らの思想の位置づけを超越論的経験論と称し、力動的かつ精妙な変化に巻き込まれる実在的経験の有り様を追求したドゥルーズにとって、思考するという行為がその範例であることを明らかにする。こうした作業を通じて、思考する行為が自己の同一性を解体し、世界の変化に織り込まれた自己の様態を要請することが示される。本稿は、こうして導き出される思考と自己の力動的連関が、把握しうる主体の想定の攪乱を通じて、変化する世界のリアリティを開示する思想であることを明らかにする。

“Real Experience” in the Philosophy of Gilles Deleuze: Focusing on the Dynamic Relation between Thought and Self

MATSUE Takuo

Today, there is an expansion of discourses focused on effectiveness and visualization in education. If the existential desire to grasp and fix the world lurks within this climate, how can we be ready to open our own eyes to the reality of incessant changes and becoming? This paper responds to this issue by examining the philosophy of Gilles Deleuze. His philosophical position called transcendental empiricism emphasizes the real experiences where human subjects are involved in dynamic changes and it can offer a clue to the question above. First, this paper argues Deleuze’s philosophical stance based on transcendental empiricism is epitomized by his elaboration of thought. Second, it shows that Deleuzian thought constructs dynamic implications in relation to the self, where the identical self is dismantled and thus exposed to relentless transformation. These arguments reveal that the concept offered by Deleuze destabilizes the prevailing assumption of the availability to fix the object-world, associated with the notion of the identical subject. Hence, it becomes clear that Deleuze’s philosophy has the potential to revisit the dominant assumption of the subject-object relation circulating through the educational scenery.

キーワード：教育言説、ジル・ドゥルーズ、自己、思考、経験

Keywords: Discourse of education, Gilles Deleuze, self, thought, experience

